

夢と現実のはざままで

～ 日本代表を応援して得る達成感 ～

松澤俊行
(ナショナルチーム強化選手)
(三河 OLC)



松澤俊行
2005年2月19日 OLC 東海大会にて

2002年に日本と韓国の共催により開催されたサッカー・ワールドカップ。

開催国・日本代表は2勝1引き分けで1次リーグを乗り切り、決勝トーナメント進出を果たした。ブラジルやドイツといった国からしてみれば「当然」といえる決勝トーナメント進出も、日本にとっては「初」の「快挙」であり、そのことを知るサッカー・ファンは大いに湧いた。期待は過去に何度も裏切られたが、それでも彼ら（彼女ら）ファンは熱い声援を送り続け、選手の力を引き出そうとしてきた。だからこそ、「選手の達成感」は即「ファンの達成感」となったのである。

彼ら（彼女ら）ファンは今、選手と共に新しい目標を見据えている。

ここ数年のオリエンテーリング日本代表チームの成績は、声援を送ってくださった方々にとっては期待に沿うものではなかったかもしれない。「現場」の中心付近に位置し続けた者としては責任を感じているし、「今年の世界選手権では是非とも『メダル獲得(3位以内)』を期待して欲しい」と宣言するのもはばかられる。いかに「地の利がある」といっても、である。

2005年世界選手権における日本チー

ムの目標は「個人戦予選全種目で予選通過」「決勝で(各人により多少のバラツキはあるが)20位以内」「リレーで入賞(6位以内)」である。

上記目標に対しては、「夢がない」と感じる向きもあるかもしれない。しかし選手たちは決して「夢」を失っているわけではない。後進が、あるいは自らが「ワールドクラスの選手」「世界チャンピオン」となる姿を想像しながら、日夜練習に励んでいる。スポーツの世界は、最もよく準備した者が勝つという「純粋な世界」である。そうした環境に生きるアスリートは、自ずと「一流の夢想家」となる。

見方を変えれば、その「純粋な世界」は、はっきりと白黒が付いてしまう「残酷な世界」でもある。そこで生き残るには、現実を直視できなくてはならない。かくして、アスリートはいざという時「一流の現実家」に変身する。



日本代表選手には、愛知世界選手権でのパフォーマンスを期待したい。
(世界選手権 2004 スウェーデンを走る落合)

上記目標には、「夢」がなくても「現実感」がある。しかも、達成したら「初」の快挙となる。どうか、皆さんにも

「『夢』を忘れず、かつ『現実』を直視する」という姿勢で日本代表チームを応援していただければ、と思う。

再び、2002年サッカー・ワールドカップの話題である。2つの開催国の内、より良い成績を修めたのは韓国の方であった。(日本がベスト16だったのに対し、韓国は4位。)韓国人サポーターが与えた自国選手への勇気、相手国や審判へのプレッシャーは日本人サポーターのそれを遥かに凌ぐレベルにあったと言われている。よりピッチに声援が届きやすいスタジアムの設計も手伝っていたようだ。

一方で、各国チームにとってプレイがしやすく、好勝負が多く生まれたのは日本側で開催された試合であったと評価された。日本のワールドカップで開催国観客の声援という「地の利」を得たのは、実は日本チームだけではなかったのである。

「甘い」という意見も聞かれるが、サッカーの日本代表チームサポーターに対する国際的な評価は日本人として誇るべきもので、オリエンテーリング関係者も多くのが学べると思う。

折角の世界選手権である。観客の皆さんには個人戦で(決勝は予選上位の選手ほど後のスタートになるため)終盤に、リレーでは早い時間帯に繰り広げられる優勝争いにも声援を送り、好勝負を演出していただきたい。そこに日本人選手が加わってれば最高だが、そうではなくても各個人の、あるいは日本チームの「目標達成」となることは充分ありえる。その瞬間も見逃さず、是非とも達成感を共有していただきたい。

私はレーンの内側で達成感を感じる立場になるよう、まずは選考レースを乗り切らないと・・・。

(松澤俊行)